

3 岩倉使節団と日本近代化

——「特命全權大使米欧回覧実記」再読——

芳 賀 徹



「特命全權大使米欧回覧実記」扉部分

I 『米欧回覧実記』と私

1

久米邦武編の『特命全権大使米欧回覧実記』全5巻、2000頁(明治11刊)は、私にとっていわば「青春の書」である。

1957年にフランス留学から帰ってまもなく、本郷の古本屋でこの5冊を見つけ、背革に金の背文字の題名と、なかにたくさん入れられた銅版の挿絵になんとなく惹かれて、大枚3000円を投じてこれを買った。そのとき、私はこの書物についてはもちろんのこと、岩倉使節団のことさえ、なにも知らなかった。しばらく放ったらかしにしたあと、ある日、自分が行ってきたばかりのフランスについての編から読みだしてみても、私は愕然とし、はじめて事の重大さに気づいたのである。

『米欧回覧実記』は、まず第一に、それまでE・H・ノーマンや羽仁五郎や遠山茂樹などによってばかり眺めていた明治維新について、まったくちがう角度から、思いもかけず広く明るくいきいきとした展望を、私の眼の前にくりひろげてくれることとなった。さらに、著者久米邦武や使節団参加者たちの来歴を調べてみるうちに、その明治への視野は、さかのぼって徳川期の佐賀や江戸や薩長にまでおのずから広がり、武士知識人たちの集中的な西洋文明学習の歴史へとつらなってゆかずにはいなかった。鍋島閑叟も佐野常民も渡辺華山も、幕臣川路聖謨や小栗忠順や栗本錦雲も、実はこの過程ではじめて私の前に登場してきたのであり、福沢諭吉や勝海舟でさえ、この視野の一角にあらためて見直されてきたのである。

『米欧回覧実記』は、第二に、それまでの明治文学史とか近代日本文学史とかの枠組みのとりかたに、その^{ベル・レトル}美文学(詩、小説、戯曲など)に限られた見かたの狭苦しさに、大いなる疑問を抱かせずにはいなかった。久米邦武の文章は、ページを開くとそれが真っ黒に見えるほどに漢語の多い、かたかな混じりの漢文体である。はじめはたしかにとっつきにくい。だが、数ページ我慢してつきあうと、短いセンテンスのなかに散りばめられた黒い漢語の高いひびきと、その映像喚起力の強さが、読者をとらえて一種緊張したリズムのなかにまきこみ、読者を放すことがなくなってしまう。そこには、西洋文明の現場に立った明治指導者たちの「驚嘆欽羨^{きんせん}」の情と、身も焦げるほどの好奇心の熱さと、祖国の現状を思いやったときの不安と、その後進性を認識しさらに克服しようとする責任感が、こもごもにあらわれて、交響する。これは、単に外交文化史の記録として卓抜であるばかりでなく、明治の全文学史にも傑出した一雄編、少なくとも記録文学というジャンルでは前後に比類をみない名品なのではなからうか。明治文学はいつもきまりきって仮名垣魯文や坪内逍遙や二葉亭四迷から始まるように説いている、あの貧弱で退屈な国文学者たちの文学史というのは、要するにみずからの貧しさをそのまま映しだした兎小屋のようなものなのではないか。

そのように思いながら調べ出してみると、第三に、『米欧回覧実記』はこれだけ重大な意味をもつはずの作品であるにもかかわらず、これについての研究らしい研究は、少なくとも1950年代の当時、いかなる分野からも皆無であることがわかった。岩倉使節団についての外交史的

研究は、戦前戦後を通じてさすがに数点発表されていたが、それらも『回覧実記』については、これが条約改正などの外交交渉になんら触れるところないとの理由からか、ほとんど言及さえしていない。国文学者の側も同様で、彼らは『実記』の存在さえ知らないのか、たとえ知っているてもこの種の硬派の作品は「文学」と認めぬことにきめていたからか、彼らの文学史研究にもこれに触れる一行の記述さえ見当たらなかった。

当時、そしてなおしばらくのあいだ、学界・論壇には、なににつけても「体制」「反体制」という安易な用語が流行し、おしなべて「体制側」はすなわち「悪」とする風潮が支配的だった。そのため、明治の悪の権化とみなされた岩倉具視を首席全権大使とし、「明治絶対主義官僚」と定義された大久保利通、本戸孝允、伊藤博文らを副使とする外交使節団は、歴史学の分野でも文学の分野でも、それに触れることさえためらわれる、一種のタブーともなっていたのだろう。明治維新史にたまたま数行言及されているのを見つけて読むと、それは岩倉使節団があたかもはじめてからプロシャ型の専制政治を学ぶことに狙いを付けていたかのごとく書き、彼らはビスマルクに励まされて絶対主義的専制官僚として「色揚げ」されてきた、などと述べていた。私は、自分の無知ゆえにおそらく公平な『回覧実記』への感嘆と、この種の専門家たちの一方的、党派的なきめつけとのあいだの齟齬の大きさに、またあらためて驚かずにはいられなかったのである。

2

こうして、幸か不幸か、『特命全権大使米欧回覧実記』という宝の山は、まだ駆けだしの学徒にすぎなかった私の前に、ほとんど手つかずのまま残り残されていた。そのことに気がつきはじめたとき、最初いささか不安だっただけに、私のよろこびは大きかった。比較文学比較文化という新しい学問分野に従っているからこそ眼の前に見えてきた研究対象であり、また逆にこのような絶好の研究対象の発見が日本におけるこの学問の存在理由をいちだんと強め、その活動の方向をさらにおしひろげてくれることを実感したからである。

それに、『回覧実記』を読みすすめてゆくと、使節団の体験には意外なほどにわが身の見聞にも近いところがある。私の留学よりも80数年前（1871-73）に米欧を回覧した彼らは、決してそれほどかけはなれた、手もとどこかぬような存在ではない。私がそれまでいくらか親しんでいた中江兆民や西園寺公望、あるいは森鷗外や夏目漱石にもまして、明治日本を設計し造営した偉大な先達たちにはちがいないが、しかし彼らも思いがけず同学の先輩といった感じの顔をあちこちで見せている。

たとえば、第一巻冒頭の「例言」は普通の書物の序にあたるものだが、そのなかに編著者久米邦武は、回覧中の連日の分きざみの忙しさを回顧して――

「故ニ汽車其都ニ達シ、僅ニ^{きやう}笈ヲ「ホテル」ニ^{ゆる}弛ムレハ、回覧即チ始ル、昼ハ輪響^{きこう}汽吼ノ際、鉄臭^{てつく}煤氣ノ^{かん}間ヲ^{はし}奔ル、烟埃^{えんあい}満身ニテ、瞑ニ^{ほう}及ヒ方ニ^{いとま}帰レハ、衣ヲ振フニ^{いとま}違アラス、宴会ノ期己ニ至ル……」（岩波文庫版、第1巻12頁、[以下I.12p.と記す]）

と、現代の外交官でもおそらく身につまされるようなことを述べたうえで、この『実記』が

ならずしも岩倉使節の諸国諸所観察の細部すべてを正確に記録したのではないことを弁明して、次のような理由をあげている。文中にいう「畠山氏」とは畠山義成（1840-76）のことで、慶応元年（1865）、五代友厚、森有礼らとともに薩摩藩留学生として英国に密航、翌2年森らとアメリカに移り、ラトガース・カレッジを卒業、明治4年（1871）4月、明治新政府の召喚によって帰国して岩倉使節団に加えられ、佐賀藩出身の漢学者久米邦武（1839-1931）とともに大使直属の随員となって、もっぱらその通訳をつとめた秀才である。久米はいう――

「諸場館ニ於テ記述スル所ハ、其行走ノ際ニ、親ク審問セルヲ録ス、此ニ当テ、畠山氏実ニ其殷勤ヲ竭シタリ、然トモ其間ニ誤謬欠略ナキヲ保チ難キハ、蓋其故七アリ、一ハ場主ノ秘シテ示サル所アルニヨル、二ハ場内ノ諸員モ亦審知セサルコト多キニヨル、西洋ノ工芸ハ、分科分業繁ク、其場ニアリ事ヲ操ルモノモ、只自己ノ一科ヲ審ニスルニスキス、故ニ各含各番、ミナ其主長ニ問ハサレハ、他人ハミナ弁知セス、因テ場内ノ諸人延引シ、親ラ懇ニ其工事ヲ説クヲ、傍ヨリ筆記シタルコト多シ、三ハ猛力ノ器械ヲ運用スル製作場ハ、輪響槌声ノ言語ヲ乱ラスニヨル、四ハ明細ノコトハ、各場ヨリ報告書ヲ送リシニ、皇城炎上ニ罹リテ、焼燼セルニヨル、五ハ時促シ途ニ急ニ、詳覧ニ違アラサルニヨル、六ハ西洋ノ俗ハ、解説ニ順叙アリ、卒爾ノ際ニ、其要ヲ抄撮シ説コトヲ欲セス、故ニ倉皇間ニ、術理ヲ問フトモ、答フ所ハ猶叙言ノ半ニ及ハサルニ、時促シ去ルコト多カリシニヨル、七ハ工芸ノ術理ハ、其技術ニ通セサルモノ、能スル所ニアラサレハナリ」（I.14p.）

このなかで、「四」の送付資料の焼失というようなことをのぞけば、他は実は私自身も1950年代半ばのバリ留学中に、程度の差こそあれ、みな経験したことがあるような項目ばかりである。当時日本は、敗戦から10年あまりたって、産業技術復興に懸命になっていたさなか、フランスにも日本の各社技師はつぎつぎにやってきて「技術移転」を試みた。留学生たちは大使館経由でよくその通訳を依頼され、私も絶好のアルバイト（1日10ドル）として、ソルボンヌの講義など放ったらかして、それに応じたのである。

あるときは、日野ディーゼルがもはや小型ノー車の輸入部品組立てだけを行なうのではなく、その製造から始めねばならぬとして、その研修のために技師・職工のグループをつぎつぎに派遣してきたことがあった。バリ郊外の工場で私が担当したのは、車体の打ち抜き工程の部門で、巨大な鉄槌が落ちつづけるなか、まさに「輪響槌声ノ言語ヲ乱ラス」現場であった。日本人技師とフランス人工員とのあいだの質疑応答の通訳に、私は終日のどを嚔らさなければならなかったのである。

またあるときは、日立の技師2人の通訳として、ヨーロッパ中の主要工場を駆けめぐった。彼らの眼目の1つはセンジミール式冷熱スチール圧延機的设计特許の購入、もう一つは日本の某アルミ工場設営のために必要な直流・交流の各種整流器の研究であった。1ヵ月あまりに及ぶその通訳行のあいだに、私は久米が右にいう「一」から「七」の事由のほとんどすべてを経験せざるをえなかった。ゲルマニウム整流器となれば、その細部のほとんどすべては文科人間たる私の理解をこえて通訳不可能、日欧両技師が片ことの英語と図とで通じあうありさまだっ

た。パーゼル郊外の有名な工作機械製造会社ブラウン＝ボヴェリの工場では、とある機械の前で高本技師が質問を発しても、相手側が解答を拒否するという「一」のケースであった。ところが、なんと、工場を出てきてみると、同技師はポケットのなかでちゃんと要点のメモをとっていたのである。

このような体験がわが身にあってこそ、『米欧回覧実記』は格段に面白く、その西洋文明への観察の周到さ、洞察の深さ、そして個々の対象把握の力強さに驚嘆することもできるのだ。私は編著者久米邦武を仰ぎみるべき大先輩とみなし、自分の留学体験を乏しいながらも自信のよりどころとして、『回覧実記』を読みとくことを試みていった。

3

いずれにしても、出発の年の満年齢で46歳の右大臣岩倉具視から17歳で最年少の権少判事長野文炳にいたるまで、明治新政府の中樞のエリート約50名を擁する、前代未聞の大使節団である。そのなかには前記の木戸、大久保、伊藤、山口尚芳（外務少輔）ら4人の副便のほか、田辺太一、福地源一郎、林董、あるいは川路聖謨の孫の川路寛堂などの旧幕臣が、外交実務担当の一、二、三等書記官として名をつらねていた。そして実は、使節団員の半数以上が内務（戸籍頭田中光顕）、宮内（侍従長東久世通禧）、陸軍（少将山田顕義）、文部（文部大丞田中不二麿）、工部（造船頭肥田為良）、司法（司法大輔佐々木高行）など各省庁の次官、局長級の理事官と、それぞれの1名ないし7名の随行専門官とからなっていたことをみれば、この使節団の任務が、条約改正交渉の期限延期の提案といった外交実務以上に、米欧の制度文物の全面的調査学習にこそ重きをおくものであったことが、よくわかる（この使節団本体に、さらに金子堅太郎、団琢磨、鍋島直大、中江篤介〔兆民〕、牧野伸顕、山川捨松、津田梅子等々の男女留学生60名近くが、米欧諸国をめざして同行したことは周知のとおりである）。

西洋文明研究のためのこの大エリート集団は、明治4年11月12日（1871・12・23）に横浜港を出帆、同6年9月13日、完全に地球を一周して帰港するまで、約1年10ヵ月にわたって、アメリカ、イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、ロシア、デンマーク、スウェーデン、イタリア、オーストリア、スイスの諸国、諸都市を、それぞれ7ヵ月（アメリカ）から数週間の長さで歴訪した。そしてその間に、一行は分流しまた合流しつつ、政治諸機関や陸海軍の軍事演習はもちろんのこと、港湾施設や造船所から、造幣局、農事試験場、製鉄・紡績・染物・皮革・陶器・ガラス等々のあらゆる工場、小学から大学にいたる教育施設、監獄、鉱山、道路・橋梁・公園などの土木工事、そして博物館、図書館、劇場、動植物園、寺院、名所旧蹟にいたるまで、西洋近代文明の所産いっさいを、見られる限りのものはすべて現場に立って見、調査し、考察し、記録し、学んだのである。彼らが見なかったものは——ただ各国の文学作品のみ、といって過言ではない。それを学ぶことは彼らの使命のうちにはなく、森鷗外、二葉亭四迷、夏目漱石、永井荷風ら、次世代の秀才たちに残された仕事であった。

4

このような、「空前」であることはもちろんだが、また「絶後」とさえいってよいような欧米文明の総合的研究の集大成、使節団が帰国後日本国民に対する「公務物件ノ一」（例言）として公刊した唯一の報告書である『特命全権大使米欧回覧実記』——その2000頁のなかから、

それならば、ここの限られた紙数のなかに、どのような一節を引いてみたらよいのか。私はいつもその選択に当惑する。

編著者久米邦武は、使節団がいくつかのチームに分かれて動いたときでも、つねにその中心たる岩倉大使に密着し、岩倉の眼となり耳となってその見聞を記録し、帰国後各理事が提出した報告（理事功程）をも参照して、この『実記』を4年がかりで編纂・執筆したのだという。だからこれは、岩倉全権および使節団一行の公の見聞報告にちがいはないが、同時に、そしておそらくそれ以上に、使節の一員としての旧佐賀藩士久米の個人的な感覚と感慨、観察と批評をも盛った旅行記なのである。その公であり私でもある、両者の間のたえざる緊張が、久米邦武筆『実記』にその文体の美を生んでいるのもあろう。

ここには、幕末遣欧使節らが繰返した即物的なパリ礼讃を承けるかたちで、久米のサンフランシスコの道路および上下水道についての記述を、まず引いてみることにしよう。岩倉一行は3週間の太平洋航海ののち明治4年12月6日（1872・1・15）サンフランシスコ着、2週間の同市見学を終えて、いよいよ翌日はサクラメント経由シカゴへの汽車の旅に出発するという日（12月21日）の、日記体の一節である。

「府中街路ノ修繕ハ多クハ未タ整ハス、土ヲ削リテ平^{へいせん}衍ニシ、車輪ヲ支^{つか}ヘサルニ止ル、空氣^{かわ}燥ケハ、車輪塵ヲ蹴起シ、人目ヲ眯^{くら}スルコト、其憂ヒハ、雨後ノ沮^{ぬかるみ}洳ヨリ甚シ、中央繁昌ノ区ニ於テモ、磚^{せんけい}形ノ木材ヲ鞏固^{かため}シテ、修メタル車道多ク、甃石ヲナシタル路ハ、甚タ少シ、車道ニ木材鞏固ノ法ハ、木材ヲ截テ、煉瓦石ノ如クシ、其切口ヲアツメテ道面トナシテ、地上ニ密敷^{みつふ}ス、猶煉火石ヲ甃^{タタム}カ如シ、如此スレハ、車輪ヲ受テ、激動少ケレトモ、修復屢^{しばしば}至ルニ弊アリ、両側ノ人道ニハ石ノ砌^{みぎり}ヲ施シ、全地灰土ヲ鞏固^{きやうこ}セルアリ、板石ヲ平敷シタルアリ、或ハ煉火石ヲ鞏固シタルアリ、新開町ニハ、板ヲ敷キタル所多シ、曾テ南鄙ニ赴クトキ、新街ヲ開ク状ヲ目撃スルニ、家屋ヲ未起サハル以前ニ、先人道ヲ修メ、板ヲ平敷シ、瓦斯管上下水管ヲ埋メ、而テ後ニ車路ヲ修ム、土功此ニ進ムトキハ、己ニ家屋ヲ營繕スルモノアリ、故ニシル、都市ヲ開クモ、田野ヲ開クト同シ、地方官ヨリ、先之ニ道路ノ便ヲ与フレハ、人輒^{すなわち}来リテ生理ヲ図ルモノアリ、之ニ反シテ、道路ノ便ヲ奪ヘハ、人乍^{たちまち}生理ヲ失ヒ、散スヘシ、○府中応用ノ便ニ至リテハ、毎町每家ニ送ル瓦斯上水ノ管、及ヒ下水ヲ流ス管ヲ埋メ、其支条ヲ屋壁ノ内ニ伝フ、室々皆気点ニ照サレ、汲^{くま}スシテ、清水ヲ用フヘシ、是等ノ便ハ、新開ノ都府、反テ旧来名都ニ勝ルトナリ、但当港ノ繁昌ニ從ヒ、水道ノ便ハヤ、欠乏ニ属ス、此地ハ海角ノ半島ニテ、山ニ水ヲ出サス、用水ハ西方三英里^{マイル}ノ地ナル、「マウチン」湖ヨリ引き、管ヲ伝ヘテ府中ニ送ル、其工費ハ、僅ニ金十萬弗ナリト（I.102p.）

1870年代初頭、西部劇の時代の、「合衆国ニ於テ第十ノ大都全」（久米）サンフランシスコの実景が、その街路を行く人びとの足もとのありさままでふくめて、手にとるように立ちあらわれてくる。久米はこの「桑^{サン}方斯^{フランシスコ}西哥ノ記」の章末に、文庫版で4ページを費やして、1845年には人口わずかに「150人」だった小村が、48年以後のゴールド・ラッシュをへて急成長し、71年の現在「149,473人」の人口を擁する「東洋西洋往来ノ枢区」とまでなった歴史を、横浜、

長崎、上海、香港などアジアの諸港と対比しながら論評している（物の量を挙げるときは1の単位まで明示するのが『実記』の記述の一特徴である）。その知識を踏まえて右の一節では、この西部第1の都市の急成長ぶりが、かえって都市基盤の整備のしかたを岩倉使節たちにその現在進行形の断面において示してくれることに、興味を向けていたのである。

栗本鋤雲もおそらく、オスマンによるパリの大改造が進行中であつたからこそ、いっそうその都市の市街計画や上下水道施設に目を惹かれたのであつたろう。その実学的関心の系譜をうけついで、明治新政府の使節団はいま彼らの長途視察の最初の滞在地で、はやくも抜け目なく市街路の舗装法や、都市開発と上下水道施設との関係などに着目している。まことに見あげたものだというべきではなからうか。

久米邦武の自叙伝『久米博士90年回顧録』（早稲田大学出版部、昭和9）によれば、そもそもサンフランシスコは幕末以来日本人のあいだで「攘夷の気拔場」と呼ばれたものだという。万延元年（1860）の遣米使節以来明治のはじめまで、何十人という日本人が「打倒夷狄」を唱えながらも太平洋を横断してこの港にやってきたが、その彼らも開発のブームに湧くこの町で、蒸気車の疾走のさまを見たり、立派なホテルに泊まって歓迎宴に招かれたりすると、いっぺんに攘夷の元気が揮発して、「どうも、どうも」といいながらしょぼんとしてしまったものだ、というのである。

いかにもさもありなんと思われて、愉快的な話だ。岩倉使節団もちろん、この都第一の宿舎「グランドホテル」に泊まって、市をあげての大歓迎をうけた。久米もこのホテルの室内装備の美麗には目をみはり、「大鏡ハ水ノ如ク、^{カーベット}氈^ニハ華ノ如ク、上^{ガス}ニ^{ろう}気燈^かヲ^く鈎下シ、昼ハ稜角ノ^{ビードロ}玻瓈七色ヲ幻シ、^{マガヒキンノコ}匱^ニ金粉ノ光ト相射ル、夜ハ^{ネジ}螺旋ヲ^{ゆる}弛メテ火ヲ点スレハ五曜七曜環匣シテ、光ヲ白玉ノ中ニ輝ス……顔ヲ洗フニ水盤アリテ、機ヲ弛ムレハ、清水^{ほとばし}迸リ出ツ」（I.79-80 p.）と、ありったけの華麗な漢語をつらねて讚美していた。そこまでは幕末のアメリカやヨーロッパへの使節たちの日記と同じだ。だが岩倉たちのサンフランシスコは、これで「気抜け」して終わるような場ではなかった。列車の不通で長びいた滞在の間にオークランドの小学校、兵学校、盲啞院、大学まで見学したうえに、さらに前引の一節にあったように「曾テ南鄙ニ赴クトキ新街ヲ開ク状ヲ目撃スルニ……」と、郊外開発の現場をも見落とさず、そのような途上の景觀にさえ学ぶべきものを学んでいた。そこが、幕末期とちがう明治の新しさであり、なかでも廃藩置県の大改革の直後に国を出てきた nation building 第一線の指導者たちの、全面開放の好奇心の鋭さ、責任感の強さ、というものであつたろう。

それにしても、この郊外でのガス、上下水道、道路の工事の囁目から、「故ニシル、都市ヲ開クモ、田野ヲ開クト同シ、地方官ヨリ、先之ニ道路ノ便ヲ与フレハ、^{すなわち}人輒^ニ来リテ生理ヲ図ルモノアリ……」と、都市基盤整備の重要性、公のイニシャティヴによる計画的都市開発の必要性を、すでに認識し、指摘しているのは驚くに値する（「生理」とは久米愛用の用語で、生計、生業の意）。岩倉たちは、すでに新首都としての東京の改造などを考えていたのだろうか。まださすがにそこまでは構想は及んでいなかったかもしれない。だが、このような現場を目撃することによって、日本でもこれからの近代化とともに都市の再開発に新しい工夫がやがて要請されることを、強く予感していたのである。岩倉使節団はこののち、ワシントンやロンドン

やパリでも、都市のインフラストラクチャー整備の技術にかならず注目し、社会福祉の一環としての労働者街の環境整備の問題にまで目を向けてゆく。

産業革命・工業化の進展とともに、欧米の都市も19世紀後半には、それぞれの歴史を負いながら急速な変化を迫られていたのであり、特命全権大使一行はまさに見るべきときに見るべきものを、しかもよく見た、と評すべきであろう。久米邦武の『米欧回覧実記』は、こうして、近代日本の文学史、外交史、科学技術史、比較文化史のみならず、都市論の歴史の上においてまで、重要な興味深い意味をもつこととなった。いまなお世界のさまざまな都市を歩けば思いおこす、マテリアリスト久米の名言の一つをここに引いておこう。——「其国ニイリ、其道路ノ修美ヲミレハ、政治ノ修荒、人民ノ貧富、頓ニ判然^{にわか}ヲ覚フナリ」（I.199p.於ワシントンDC）

II 岩倉使節団のアメリカ体験

5

岩倉使節団と留学生の一行計百余名の大集団が、セントラル・パシフィック鉄道の5輻仕立ての特別列車でサンフランシスコを出発したのは、明治4年12月22日（1872・1・31）。3年前にユタ・テリトリー内でユニオン・パシフィック鉄道とつながって、文字どおり大陸横断鉄道となったばかりのこの汽車で、一行は厳冬のロッキー山脈を越えてシカゴに出、少なくとも明治5年の正月元旦は首都ワシントンでゆっくりと祝うことができるはずだった。

ところが、12月26日、ネヴァダ州からユタ準州に入ってもないところで、ロッキーの山路が例年になく大雪のために交通途絶との報が入った。そのため日本使節一行はやむなく予定外のソルトレーク市に迂回を強いられ、このモルモン教の町になんと20日近くも淹留して鉄道の再開を待たなければならぬこととなった。もちろん、転んでもただでは起きぬ岩倉であり、大久保であり、久米邦武でもあったが、それにしても「山中ノ僻邑」（I.146p.）での3週間近い強制休暇は、明治の人間にとってもさすがに長すぎたらしい。関ヶ原の雪で新幹線が1、2時間遅れても大騒ぎになる昭和・平成の日本からは、想像を絶する状況だが、前途に大使命をもつ岩倉一行の焦燥のほども十分に思いやられる。

しかも彼らは、やがて小林清親が「光線画」『高輪牛町朧月夜』（明治10）に描くような、いじらしくも健気な蒸気車に引かれて、真冬のロッキーを越えようとしていたのである。思えば、19世紀後半の汽車の旅、それもワシントンまで「総程三千百九十六英里^{マイル}」（I.191p.）というような大陸横断の長旅は、このソルトレークでの思いもかけぬ長逗留までふくめて、まことに劇的ともいうべき緊張と忍耐と昂揚とをともしなうものであった。

そのためもあってか、1月14日（1872・2・22）、ようやく汽車が動きだして、ユタからワイオミング・テリトリー、そしてネブラスカ州へとロッキーと大草原を走りつづけてゆくあたりの『回覧実記』の文章は、著者久米邦武の知る限りの漢詩風漢語や中国故事の知識を動員して、使節団全員にとって生涯はじめてのこの大旅行の感覚と感慨とを伝えようとしている。

1月14日の午後おそく、オグデン駅で「^{しほうしや}且庵車（ダイニンクカール）」2輻を増結して出発すると、特別列車はたちまちロッキーの「荒寥」たる山あい深く入り、登りつづけて、海拔

2000メートルをこえる峠の寒村ワサッチ（Wahsatch）に向かっていった。『『エコー』ヨリ鉄道ノ傾斜ヲマシ、時ニ洞道ヲスキ、又ハ山^{さん}崖^{がい}壁立ノ間ヲスク、二十五英里間ニ、一千三百尺ヲ上リ、一村駅ニアフ、此ヲ『ワッサック』山村トス、亦一ノ勝景ノ地ナリ、時ニ日ハ已^{すで}ニ暝^{くら}シ、飛雪モ初メテ晴タレハ、寒月洗フカ如ク、清輝ノ峰峰ノ岩稜ニカ、ヤキタルハ、白刃ノ上ニ照ヤト疑ハレタリ」（I.150p.）

岩倉たちはこのような寒月の下の山景を記憶にとどめ、記録にとどめることまでも、彼ら外交官の旅の使命の一端と心得ていたようである。翌1月15日の朝、前途の鉄道橋の修理が終わったとの報がとどいて、汽車はユタからワイオミングへと入っていった。まだ州となっていない、テリトリー（準州）と呼ばれていた「極目千里ノ曠野」（I.151p.）であり、白人と先住民インディアンとの抗争があちこちで始まっている「西部劇」の一つの舞台でもあった（「インディアン」については、「是ハ日本人ノ流裔^{りゅうえい}ナラン」という勇猛の部族のことなどまでふくめて、久米はすでにネヴァダ州横断の部分で詳述していた（〔I.131-134p.〕）。

「萎^い蕪^じタル野^や艸^{そう}、莽^{ぼう}莽^{ぼう}トシテ天ニ連リ、処々ニ印^{インディアン} 甸土蕃^{ばん}カ穴居スルニ逢フ、只鉄道ノ側ニハ、十余英里ヲ隔テ、二三家ノ人家アリ、鉄道ヲ離ルレハ、千里ノ荒^{がい}州^{いはん}崖畔ヲシラス、飛鳥ノ翔^か影タニミサレハ其景況ノスサマシキコトハ想像サレタリ、米^あ国ノ広漠ナルコト、固^しリニ耳食^{あき}ニ飽タレトモ、実況ヲ目撃スレハ、猶驚クニアマリアリ」（I.154p.）

この種の文を読むと、日本使節一行はまるで宋元の峻厳な水墨山水画のなかを旅していたかのごとき観がある。実際に彼らはこの荒漠たる大高原をつらぬいて進むとき、連想のよりどころとして、もはや日本の古典ではありえず、中国の古画や古文しか自分のなかに見いだしえなかったのかもしれない。一日、雪晴れの2000メートル級の高地を、それでもその景観の変化をつぶさに観察しながら走りつづけて、夜になると旧暦正月の満月がこの風景を照らした。一行が横浜を出立してから、はやくも3度目の満月である。

「夜ニ入テ、寒光ノ玻窓ニ映スルニ驚キ、車中ニ首ヲ擡^{もた}ケミレハ、猶茫々ノ荒原ナレト、道ノ左右ニ撥^{ひら}キタル雪塊ハ、氷ノ岡ヲナシテ、明月ノ光ニカ、ヤキ、玉^{ぎよく}ノ中ヲキリヌケル心地ソセリ」（I.155p.）

こういう文章は、このとき車中で矢立の筆で手帳に書きしるしたものか、それとも2日後にシカゴに着いてから、その宿で書いたのか。あるいはこれから1年半後の帰国ののちに、車中での覚え書を見て回想しながら、まとめたものか。いずれにしても、車窓の明るさに驚いて「首ヲ擡」げてみると……などというところは、そのときの実況と実感を直接に伝えていて、みごとな措辞というべきだろう。「玉ノ中ヲキリヌケル心地」で終夜走りつづけて、翌正月16日、日の出とともに目をさましてみると、それは人家数十戸の「ルワメー」村、つまり西部劇の決闘で有名なララミー牧場の駅だった（I.156p.）。

この日の午前中に汽車はワイオミング準州からネブラスカ州に入り、車窓に見る河にはじめて小鳥の飛ぶのを眺めて、「是ヨリ人境ニ入タルヲ覚へ」た。夕刻、このグレート・プレーンズをサウス・プラット河（South Platte）沿いに走ることの感慨をのこした『回覧実記』の次の一節は、30数年前にはじめてこれを読んだときから私の心をとらえた文章として、これまでも『実記』を論ずるとよく引用したのだが、いままた読みかえてみても、やはりすばらしい。明治の外交官はこのような名文をも書きえた一例として、再び引いておこう。

「是ヨリ南『プレッチュ』河流ニソフテ走ル、夕陽野ニミチテ、千里ノ黄艸ハ茫トシテ寒烟ヲ生シ、河水清クシテ時ニ瀨声ヲキク、青山ノ日ニ上ルナキモ、自ラ気色ノ愛スヘシ、況ヤ三日ノ間、無人ノ荒原ヲスキ、武師カ未タ征セス、張騫カ未タ探ラサル、遼遠ノ漠野ヲ始テ鑿空シ来リ、此矚目ヲナシツ、東方繁庶ノ域ニ達セントス、車廂穩カナルモ、転輪ノ猶洪キヲ覚フナリ」（I. 157-158p.）

スリルに富んだ厳寒のロッキー山地を走りぬけてきて、ようやく人里近い地域に入ってきたことを感じる安堵感と、夕日の高原をゆく若干の感傷とが、文章の語彙とリズムのうちにのこずから流れていて、美しい。しかも、ようやく「人境」に入った以上、一刻も早く東海岸の「繁庶」の域に達したいと、心はかえってはやりだし、車輪の速度さえ遅く感じられるという。これは明治4、5年の日本の使節、留学生一同の、このときの焦燥と期待の心理を、そのまま代弁するような一節でもあったろう。

「東方繁庶ノ域ニ達セントス、車廂穩カナルモ、転輪ノ猶洪キヲ覚フナリ」とは、どこか他でも知っているような文のリズムだと思う。するとそれは、33年後の明治38年5月、日本艦隊の佐世保出撃に際し、参謀秋山眞之が大本営あてに発信したという有名な電文の後半、「本艦隊ハ直チニ出動、コレヲ撃滅セントス、本日天気晴朗ナレドモ、波高シ」であることに気がつく。両者の底にはなにか共通の、はやり昂ぶる精神の緊張、いわば「西洋」に対決するときの明治日本人の武者ぶりがあったことは、たしかであろう。右の文中に「武師カ未タ征セス、張騫カ未タ探ラサル」と、またにわかには中国漢代の故事への言及が出てくるのも、前に一言触れたように、著者久米がこの回覧中とくに精神の昂揚をおぼえたときに愛用する一種の誇張の修辞法であった。このように表現することによって彼は、異文化のただなかで自分を見失ってしまうことなく、かえって対象をわがものとして「領略」することもできたのである。

右にいう武師とは、漢の武帝の命で武師城を攻略した將軍李広利のことだが、張騫はいうまでもなく西暦1世紀に西域に派遣された外交使節であり、偉大な探検旅行家であって、それゆえに久米の連想にもすぐに浮かんだのであろうが、さらに興味深いのは久米がここにすぐつけて「鑿空」（新しく道をうがち開く）という熟語を使っていることである。これはまさに『漢書』の張騫伝に「西北ノ国始々通之於漢ニ矣。然々騫鑿空」とある言葉である。つまり、『回覧実記』の執筆者はこの古典の典拠をちゃんと心得て右の熟語を使っていたことになる。驚くべき博識だが、これは漢学出身の久米個人の放れわざであったのか、それとも幕末維

新期の知識人にとってはごく普通の教養の一端であったのか、私にはその識別ができない。だが、幕末の佐賀藩では経書よりも史書、地誌の類が尊重されたというから、おそらく久米ならではのファイン・プレーだったのであろう。

7

岩倉使節一行はこうして西部の大山脈と大平原をつらぬく長い汽車旅のあと、大火直後のシカゴにはわずか1泊だけで旅を急ぎ、2夜連続の夜行で走りつづけて、明治5年1月21日(1872・2・29)、みぞれの降る午後3時に、ついにワシントンDCのユニオン・ステーションに到着した。サンフランシスコを出発してからちょうどひと月たった。

その旅の途中、オハイオ州からペンシルヴァニア州に入ってもないところで、久米邦武は『実記』の日記体の記述から1字下げて、それまでの旅中の見聞と感慨とを一括して次のように述べている。やや長いが、よく一行の回覧の方法を示しているので、引いておこう。

「一行ノ汽車、桑港ヨリ海岸山ノ^{トンネル}隧道ヲ出テ、茫漠タル加利^{カリ}福^ホ尼^ニノ平地カ、天ニ連リ、^{ペイ}平^{イン}衍ナルヲ一見セシヨリ、米国開拓ノ情実ニハ、人ミナ感触ヲ生シ、川ヲミレハ其漕運灌溉ニ注意シ、野ヲミレハ其分田道路ニ注意シ、山ヲ走レハ其材木礦利ニ注意シ、村駅ヲ過レハ其^{きゅうしゅう}鳩^{しゅう}聚(集落戸数)生理ノ状ニ注意シ、目ノ^{うつ}撃^つトコロ、車中ミナ開拓ノ談ナラサルハナシ、「ネヴァタ」「ユタ」ニテ、已ニ貴金ノ利ヲ^{とき}説^とタリ、^{ロッキン}落^{キー}機^ー山ニテ漠野^{ミンシッピ}鍔路ヲ説キ、密河ヲ渡リテ水路運輸ヲ説キ、「オマハ」ニテ玉蜀黍及ヒ移民ノコトヲ説キ、其他橋梁ノ設ケ、道路ノ修否ヨリ、「モルモン」宗徒^カカ^ち爾^ち地(塩気地)ヲ開墾シ、羊毛ヲ紡織スル等、ミナ荒地開植ニ於テ、多少ノ感触ヲ与フルモノナリ、今市^シ高^カ俄^ゴヲ^フ発シ、此州(オハイオ)ニ至レハ、野熟シ林茂シ、人烟^{ちゅうみつ}稠密、已ニ洋々タル^{シグナル}開明ノ域ナリ、因テ前路ノ景況ト相較シテ、此ニ其進歩ノ順序ヲ述ル、左ノ如シ、

^{そもそも}抑 米ノ合衆国ハ、其始メハ^{アタラン}庄^{ラン}瀾^ン海ノ平地ヨリ開拓ヲハシメ、独立ノ後ニ、密河谷平地ニ開拓ヲ広メ、約三十年ツ、ニテ、^{ぜんぜん}漸々東ニ及ホセシコト、已ニ第五卷(第一冊アメリカ編)ノ末、桑港ヲ論スルトキニモ謂ヘル如シ、彼港ヲ^{いう}発シテヨリ、当州ニ至ルマテ途上景況ハ、合衆国開化ノ歴史ヲ、順次ニ目撃シ来ルト謂ヘシ」(I. 181-182p.)

車窓に顔を貼りつけるようにして沿線の景観をうかがい、また座席に直って囑目の事柄を論じあい、同行の駐日アメリカ公使デロング夫妻に質問してはまたざわめく——そのような岩倉一行の車中の旅すがたまでが彷彿とするかのようだ。本稿では、右の文中にいうような沿線各地各駅での観察の記事は、あまりに盛りだくさんなので引用を省略し、私自身の好みもあって、むしろ一行の汽車旅の^{センセーション}感^ン覚^ンを伝えるような詩的紀行の部分のみを引くことが多かったが、実は彼らの大陸横断はもちろん漫然たる観光ではありえず、道中すべてこれ、多様な国土開発の実際に関する学習・考察の旅であったといってよい。「米国開拓ノ情実ニハ、人ミナ^{ミナ}感^カ触^チヲ^ウ生^シシ」という面白い表現は、まさに現在進行中の西部開拓第一線を目のあたりにしたときの一行の感興と感銘とを意味するものであったろう。

たとえば、列車がネブラスカ州の州都オマハを出た直後には、ミズーリ河を仮の橋で渡るた

めに河原に数時間停車するということがあったが、岩倉一行はその間にも、すぐ近くに建設中の新しい大鉄橋の橋脚埋設工法をつぶさに見学したらしい。そのとき、工事現場の河原を粗末な一列車が走ってきたが、見るとそれは州内に新移民を運ぶ格安の「エミグラシ、カール」（エミグレーション・カー）であったという（I. 161p.）。

そこでさっそく日本人一行は、「蒸気車ノ便ト、玉蜀黍ノ利トニヨリ、漠野ヲ化シテ烟花ノ場トナス、^{ここに}是モ米国開拓ノ一般ヲミルヘシ」（同）との学習をあわせてすることになり、久米はさらにそこから進めて「人多ケレハ天ニ勝ツ、米国ノ曠土モ、人鳩^{あつま}レハ開ク、東洋ノ沃土モ、其人力ヲ用ヒサレハ、国利ハ自然ニ興ラス、收穫モ自然ニ価ヲ生セス」との考察におよぶ。そして従来、東洋の指導的知識層は、学問するといえはそれは「高尚ノ空理」か「浮華ノ文芸」のみ、富殖開発というような「民生切実ノ業ハ、瑣末ノ陋事トシテ、絶テ心ヲ用ヒス」「夢中ニ二千年ヲ経過シタリ」（I. 163p.）と、この漢学者は「学問のすすめ」（明治5～9）の福沢諭吉そのままの日本旧文化批判の持説を展開せずにはいられなかったのである。

久米邦武が福沢をどれほど読み、どれほど意識していたのかは、よくわからない。『回覧実記』全5冊に福沢の名は1度も出てこない。だが彼の『西洋事情』（慶応2～明治3）や『西洋旅案内』（慶応3）などは、少なくとも米欧回覧への出発までには当然読んでいたものと想定される。だから、若干はその影響もあるかもしれないが、それ以上にこの両者の伝統的虚学批判における共鳴は、幕末日本の実学派知識人としての共通の背景に由来するものであったろう。

ただ、福沢の『西洋事情』は、万延元年（1860）と文久2年（1862）のアメリカおよびヨーロッパへの幕府使節の一員としての旅行体験を巧みに生かしてはいるにしても、その主要部分「外編」はジョン・ヒル・バートン著の『政治経済学』（John Hill Burton, *Political Economy*）の翻訳（驚嘆すべき名訳!）であったし、『西洋旅案内』は慶応3年（1867）の2回目のアメリカ行きの見聞を織りこんでいるにしても、軽便な1種のハウツーものにすぎなかった。それにくらべて久米の『回覧実記』全2000ページは、一貫して米欧文明の現地・現場に立っての即物的観察の日記体の記録であり、その観察にもとづいての東西比較文明論であり、さらには「実学」よりは「虚学」に属すべき詩的紀行体の文章さえその間に随所に織りこんで、使節団のムードの多様な転調を奏でていた。久米の編著は福沢の数々の名著に比すべき卓抜な西洋事情・西洋文明論の書でありながら、またそれとはまったく別個の独自の文学的価値をもつ作品だったのである。

8

さきの長い引用の末尾で、カリフォルニアからオハイオまでの長い横断旅行は、そのまま「合衆国開化ノ歴史ヲ、順次ニ目撃シ来ルト謂ヘシ」というのも、使節団一同の感想ではあったろうが、まことに適切な、みごとな把握ではなかろうか。ワイオミング準州の大草原のあたりは、コロンブスやアメリカ・ヴェスプッチの新大陸発見の時代そのままと思われるほどの原始さながらのすがたであり、カリフォルニアもサンフランシスコから一步奥に入れば「猶依然タル混濛ノ世」であり、ネヴァダ、ユタまたしかり。ネブラスカからアイオワに下ってようやく開け、オハイオまで来れば「已ニ洋々タル開明ノ域」、しかしそれでもまだ「穽^{シグナル}イ、とい

うのである。

地理と歴史とを結びつけて、しかも実感のこもったこのような北米開拓史の展望は、少なくとも日本ではこれがおそらく初めてであったろう。ペリーの黒船が来てからまだ20年にも満たぬ間に、日本人の西洋知識と西洋体験が一挙にこのレベルまで広まり深まったことに、あらためて一種の感慨をおぼえないわけにはいかない。万延元年（1860）の新見豊前守、村垣淡路守、小栗上野介らの遣米使節は、パナマ地峡経由でワシントンに向かったのであったし、慶応3年（1867）の福沢の2回目の渡米のときも同経路であった。岩倉たちのちょうど1年前、明治3年（1870）12月28日にサンフランシスコに着いた西園寺公望（1849—1940）は、その1年半前に開通したばかりの大陸横断鉄道でニューヨーク、ワシントンに向かい、やがてイギリス経由でフランスに留学するのだが、その汽車旅も満21歳の若い貴族には「身^{あたか}恰も翼の生えし心持にて、愉快^{いうべからず}不可言」とただ面白いのみ。山中の車窓に先住インディアンのすがたを見かければ、「今日に至ても、如此姿なり、実に夷狄禽獸とも云べし」と勇ましく言い捨てるだけだった（『欧羅巴紀遊拔書』）。

こうしてみると、当然のことながら、日本側には幕末以来『海国図志』や『瀛環志略』など久米も愛読した中国系の西洋地理書と、福沢ら洋学者の研究による西洋知識の急速な蓄積、および開国と維新による急激な社会変化があり、アメリカ側にもまったく同時期に、南北戦争（1861—65）による混乱と停滞、そして大陸横断鉄道の開通というような急速な開発の進展があった。岩倉大使一行はその両国の文化がまさにはじめて真っ向から出会うべきときに、その歴史的な遭遇を演じた、しかも一挙に、画期的というべき知的レベルの高さにおいてそれを演じた、外交・文化の大使節団であったといえるだろう。そして彼らが当時最盛のヨーロッパを回覧する前に、まず「未開」から「開明」にいたるアメリカを体験したことは、彼らにとってなんといっても適切な文明学習・西洋研究の教程であった。

Ⅲ 西洋文明の学習と領略

9

右の『回覧実記』からの引用に、岩倉使節団がアメリカ西部の荒涼たる風景を走りぬけてようやくオハイオ州に入ってきたときの感想として、「已ニ洋々タル^{すで}開明^{シグナル}ノ域ナリ」という面白い表現が使われていた。いったい、明治5、6年の日本使節一行にとってこの「開明」とは、つまり19世紀西洋の文^{シグナリゼーション}明とは、なにを意味していたのだろうか。

それは『米欧回覧実記』全巻を通じて、たえず、いたるところで問われ、観察され、論究されている問題であって、とてもここで一言に要約できるようなものではなかった。

近代西洋の文明とは、岩倉たちにとっては、さきのオハイオ州の一節でいうならば「野熟シ林茂シ、人烟^{ちゆうみつ}稠密」となることであった。ロッキーを越え大草原をつらぬいて彼らが乗ってきた、大陸横断の鉄道そのものでもあった。サンフランシスコではやくもつぶさに観察し、以後ワシントンでもパリでも繰り返して詳述する、瓦斯^{ガス}・上下水道から街路舗装や街路樹植樹、また公園や市内交通網にまでいたる、いわゆる都市基盤の整備の問題でさえあった。そしてそれ

らの整備をえていよいよ商業、工業と人口が集中し、そのため石炭の黒煙濛々と天に薫じて「落霞（夕霞）モ為ニ黒」き（Ⅰ.180p.）ピッツバーグ、イギリスに渡ってからはなおさらのこと「全府石炭ノ烟、天ヲ掩ヒテ空氣為メニ昏黒」（Ⅱ.58p.）のマンチェスター、「夜中ニ此府ヲ望メハ、所所ノ烟突ヨリ、炎火ヲ噴キ、赫赫天ヲ焦シ、殆ト火災アルカト疑愕セシム」（Ⅱ.191p.）というグラスゴー、またバーミンガムなど、名だたる「雄都」の、ここを先途と昼夜旺盛に「公害」をまきちらして活動するさまにほかならなかった。

副使大久保利通も、とくにイギリスで各地各都市のあらゆる分野の工場を歴訪し、その黒煙が天に朝じてやまぬ壮観に驚嘆し、心奮いたつのおぼえたらしい。その種の感慨を後輩大山巖にあてた手紙（明治5・11・20）に洩らしているし、久米邦武はまた彼なりに、貿易と金融と商工業と交通が集中して昼夜「喧闐」と「殷賑」（いずれも久米の愛用語）のやむことのない大都市、ニューヨークやロンドンの活況には、またも中国古典『戦国策』にいう齊の都臨淄の「車轂（車輪のこしき）撃ち、人肩摩す」、そして「汗ヲ揮ヘハ雨ヲ成ス」との、繁栄の修辭を想いおこさずにはいられなかった。

つまり、岩倉使節団の米欧回覧は、前から繰り返し述べてきたように、その文明のほとんどあらゆる面におよんだが、なかでも彼らの関心の最大の焦点の1つが、19世紀初頭以来とくにイギリスを先頭にして進められてきた産業革命の成果——政治・経済また教育の制度と蒸気車・蒸気船の新交通手段に支えられ、またそれらの新しい展開をうながしながら推進されてきた工業化と都市化と諸地域間交易の隆盛にあったことは、疑いえない。岩倉一行はこの19世紀ヨーロッパにおける産業革命の展開の歴史と、そのさまざまな動因とを、「産業革命」という用語こそまだ使ってはいないにしても、すでによく認識していたらしい。大久保などはイギリス各地で、黒煙濛々たる工業化の盛況にときに圧倒されて、自分はとてもこのような時代に適應できない、このような富国の域にまでいまの日本を導いてゆく自信はない、と深刻な挫折感を洩らしたと伝えられる。同じく副使木戸孝允が、その『日記』を通じてみても、しだいに神経症を昂じさせていったようにみえるのは、その持病のせいばかりではなく、この文明度の格差を前にしての焦燥のゆえでもあったろう。

だが少なくとも大久保は、1872年におけるイギリスと日本との間のこの「富強」の格差は、文明の格差というよりも、むしろ産業化（工業化）の時差であって、それも「蒸気車發明アッテ後ノ義」、つまり「五十年以来ノ事」（前掲、大山宛書簡）ないしは40年以来的こと、ということを知っていた。そのことを知ったとき、彼は「それくらいならば、あるいは」とふたび勇気をふるいおこしたという。そのような知識と知恵を大久保に吹き込んだのは、岩倉一行の渡英を迎えるために帰国していた駐日イギリス公使ハリー・パークスか、その書記官で日本学者のジョージ・アストンか。あるいはやはり歴史家で勉強家の久米邦武自身であったかもしれない。久米は『回覧実記』第2冊英国篇の『倫敦府ノ記』の一節に、次のように繰り返し書いている。

「当今欧羅巴各国、ミナ文明ヲ輝カシ、富強ヲ極メ、貿易盛ニ、工芸秀テ、人民快美ノ生理ニ、悦楽ヲ極ム、其情況ヲ目撃スレハ、是歐洲商利ヲ重ニスル風俗ノ、此ヲ漸致セル所ニテ、

原来此洲ノ固有ノ如クニ思ハルレトモ、其実ハ然ラス、歐洲今日ノ富庶ヲミルハ、一千八百
年以後ノコトニテ、著シク此景象ヲ生セシハ、僅ニ四十年ニスキサルナリ」(傍点原著者)

「一千八百三十年間ニ、汽船鉄道ノ便始メテ起リシハ、歐洲ノ貿易、一変ノ運ニテ、英国
ノ人民、首ニ此ニ注意ヲ生シ、政府ハ衆ノ渴望ニ迫ラレ、製作ノ芸術ヲ開クヘキ、教育ヲ興
サント議ヲ起セシハ、今ヲ距ル僅ニ三十四年前ヨリセリ」(Ⅱ.66p.)

日英ないし日欧間の工業化の時差を、大久保は「五十年以来ノ事」としたのに対し、久米は
右のように「著シク此景象ヲ生セシハ、僅ニ四十年ニスキサルナリ」と、10年も短く見積もっ
た。さらにイギリス政府が工業技術教育に本腰を入れはじめたのは「僅ニ三十四年前」と、い
ちだんと短く考えることも可能なことを示したうえに、アルバート殿下の尽力によってハイド・
パークで世界最初の万国博覧会が開催されたのは1851年、つまりいまから20年前の「我嘉永四
年ノコトニススキス」(Ⅱ.67p.)とも書き加えている。

この文明の時差とは、蒸気車鉄道の敷設とか石炭の使用量というような項目を別とすれば、
かならずしも客観的に測定しうるものではなく、主観的な見立て、それも後進国の者の側から
の目測である部分が大きいはずだが、岩倉使節団がとくに当時最盛のイギリスでこの時差を強
く自覚し、しきりに問題にしたらしいことは興味深い。それを自覚し問題にすること自体が、
いかにも明治的な(そして日本的な)「欧米に負けるな、追いつけ」の意識の発動であること
はいうまでもなく、岩倉たちがすでに一種の単線思考型の進歩史観、ジョージ・サンソムの
『西欧世界と日本』での用語を借りれば、“the dogma of perfectibility”(進歩向上可能とい
うドグマ)にとりつかれていたことをも示している。そしてその時差を50年から20年へと、
なるべく小さく見積もりたがっている点も、彼らの切々たる自己激励の心情をよく伝えている。

岩倉一行の対英時差見積もりの平均が40年と30年の間ぐらいにあったとすれば、それは意外
に的を射ていたかもしれない。そのイギリスと日本が、ロシア、中国、インドを包囲して日英
同盟を結ぶのが明治35年(1902)であり、その3年後には日本は対露戦争に勝利して世界の
「列強」ないし「一等国」に伍することにもなるからである。そして面白いことに、その日露
戦争前後のころから急増する留日中国人学生の中には、西洋での岩倉たちと同様に、故国の
後進性を慨嘆して、日本への遅れを50年、40年と見立てる者もいたらしい(厳安生『日本留学
精神史』岩波書店)。すると、ちょうどそのころ、夏目漱石『三四郎』(明治41)の主人公たち
は、西洋近世300年来の文明の歴史をわずか40年でなぞろうとする明治日本の性急さ、浅薄さ
を、批判しはじめてもいたのであった。

10

だが、前にも触れたように、西洋人文に原語で接して、その文明の奥行きを学ぶよう
になるのは、鷗外、漱石、敏、荷風ら、岩倉使節団一行のすぐ後の世代に残された仕事である
(それにしても、このパトントッチは驚くべく早くすみやかにおこなわれた)。岩倉使節一行に
とってまず喫緊の最大の課題は、日本国民の生き残りを賭けて富国強兵をはかり、そのために
殖産興業のあらゆる方式と国民教育の制度とを西洋先進諸国の現場に立って学びとり、「領略」
することにほかならなかった。これらを最優先の政治課題とすること自体、一行が米欧回覧の

途上にえた重要な認識であったといえるが、その学習のために傾けられた彼らの禁欲的努力の密度たるや、いかに明治初期の場合とはいえ、ただ驚嘆に値するものである。

それは『米欧回覧実記』における詳密をきわめた観察と記述のスタイルそのものに、如実にあらわれている。『回覧実記』のどのページを開いても、それはうかがえるが、ここでは殖産興業策の学習の点でもっとも充実していたイギリス滞在中（明治5・7・13 [1872・8・16] ～5・11・16 [1872・12・16]）の、各地の工場歴訪の日々の記述から、1、2の例を引いてみよう。まるで、久米邦武はこれらの記述から、やがて日本でそのままその機械の構造や工程を再現することを期していたかのような詳細さ、精密さである。

まず、明治5年9月22日、曇りの日、ヨークシャーの商業都市ブラッドフォードの南郊にリスター紡績会社（Lister's Manningham Mills）の工場を見学したときの記事の一節である。この日の朝、岩倉一行は同じく近郊に、まず企業家「タイトル」氏（Sir Titus Salt, 1803-1876）が設計して完成したばかり（1871）の、一種の理想主義的工場村（industrial village）ソルテヤ（Saltaire）を訪ね、そのアルパカ製造工場と、労働者のための学校、病院、養老院、集合住宅などの施設を見学した。そのあとふたたび汽車でリスター工場のあるミッドランドに廻ったのである。ここで彼らは、中国・日本から輸入した屑繭、屑糸を紡いで繊美な絹糸とし、やがて絹布を織りだす「機巧絶倫」の紡績機械を見て、感嘆した。その絹糸精練の工程の一端――

「○此糸ヲ数条一束シ、梳櫛ノ盤ニカケ引切ル、梳櫛ノ盤トハ、鍔盤ノ上面ノ周圍ニ、鍔針ヲ以テ、細密ナル梳ヲ施シタルモノナリ（此盤ハ已ニ羊毛ヲ紡スル器械中ニモアリ）、此盤ハ三箇相集リテ転回ス、第一ノ盤上ニ向ヒ、連環櫛ヲ出タル絹ヲ束シ、垂下シテ漸漸ニ降ラシメ、此ニ機アリテ其糸ノ端ヲ鍔齒ニ挂ケ、并セテ之ヲ引切レハ、糸ハ盤ノ周圍ニ、白髻ノ如ク、参差トシテ垂レ、盤ノ回ルニ從ヒ、糸ハ風ヲ帯ヒ宛モ白犀ノ槍鞘ヲ振回スルカ如シ、盤回一周ニ至ル処ニ、盤下ニ管ヲ設ケ、蒸氣ヲ吹出ス、此力ニテ輕輕ニ絹糸ヲ吹き、糸ハ倒ニ飛揚スル勢ニテ、第二ノ盤ナル鋼齒ニ吹カハル、盤ノ転スルニ從ヒ、第一ノ盤ヨリ離レ、第二盤ノ櫛ニ挂リテ回りサリ、第一盤ノ梳根ニハ、渣屑ヲ残セルノミ、第二盤ヨリ第三盤ニ移ルモ亦然リ、第三盤ノ末ニ至リ、挨次ニ其白毛ヲ収メ、一条ノ大糸トナス、両ケノ輪盤交接ノ際ヨリ吹ク、蒸氣ノ煦嘘ニヨリテ、糸質ニ光潤ヲ生セシメ、盤ヲ出テ大糸トナルトキハ、已ニ純粹ノ白綿トナルヲ、又紡シ、更ニ紡シ、遂ニ至纖ナル絹糸トナス、之ヲ瓦斯ノ火中ニ貫キ、輪ヲ以テ急ニ繰レハ、糸ニ生シタル細芒ノミ焼ケテ、糸ハ更ニ粹白ナリ、此烈火中ヲ過キシムルハ、細芒ヲ焼クノミナラス、又布糸ノ質ニ存スル垢膩ヲ焼キ去テ、色ヲ白クセシムルモノナリ、布ヲ晒ストキニモ、此法ヲ用ヒルトナリ」（Ⅱ.290-291p.）

ほんの一節を引いただけなのに、書き写してみればずいぶん長い。「連環櫛」とか「渣屑」とか、「挨次」（あとからあとからと続いて）とか「煦嘘」（息を吹きかけてあたためる）とか、見なれぬ難しげな漢語も少なくない。しかし、それだからといって『回覧実記』の随所に、という以上にいたるところに、詰めこまれたこれらの近代工場見学記録の部分を敬遠し、飛ばして読んでいたのでは、『回覧実記』の醍醐味、そして岩倉使節回覧の実質は伝わらないでしま

うだろう。

だいたい、手もとの漢和辞典を文庫版の1ページにつき2、3回引くのをいといさえしなければ、いまの大学生にとってでもけっしてわかりにくい文章ではない。いや、むしろ、右の1例でいうなら、紡績機のさまざまな部分が次々に巧みに運動して、荒い糸束がついに「至織」「粹白」の絹糸に練りあげられてゆく工程が、私のようなまったくの素人にさえ眼に見えるように、手にとるように、浮かびあがってくる。重厚かつ明快であり、そのうえに「機巧絶倫」の工程を息をこらし目をこらして追う者の感動をさえ裏に宿した文章といえるだろう。

岩倉大使の随員久米邦武の職務は、終始大使に密着して行動し、その眼その耳となって大使の見聞を記録し、これを日本国民に報告することだった（外交使節団がその視察報告を国民に対する「公務」の1件とするということ自体、これ以後今日の首相、外相の「外遊」にいたるまで、二度と企てられたことがないのではなかろうか。明治新政府とは、なんと理想主義的に民主的でまた国際派であったことか!）。——だが、多くの場合、とくに各種工場施設や博物館や政府機関や史蹟視察の際には、随員久米は大使岩倉よりもはるかに鋭く、はるかに先の細部まで凝視し、耳を傾けていたのではないかと思われる。明治11年（1878）、『米欧回覧実記』全5冊がついに公刊され、さっそく1部が前特命全権大使岩倉具視のもとにとどけられたときも、岩倉はこれを一瞥して「なるほど、私の眼にはこのようなことまで見えていたのか」とはじめてさと、愕然としたにちがいない。

それほどまでに、久米邦武は右の一節でも、熾烈な好奇心をもって機械の作業の工程を追究している。元佐賀藩漢学者久米が、実は一方では、すでに明治初期のころから西洋系の物理や化学に興味をもってこれを学習していたことは、北海道大学『回覧実記』研究グループの高田誠二教授らの最近の研究によって明らかにされている。だから久米はマンチェスターの染糸工場でも、イギリスのミントンやフランスのセーヴルの陶器工場でも、化学用語を駆使してその工法、工程を説明することができた。だが彼は、単にその種の知識を披瀝するというよりも、その理学的興味をもって製造過程を逐一追うことに一種の禁欲的快感をおぼえ、さらにその複雑さを漢語によって表現しつつ、「領略」しおおせることに、維新期の文科人間としてのスリルに富んだ快感をおぼえていたにちがいないのである。

そのように思わせるに足る上の一節であったが、久米はたしかにこれを自分の感覚の記憶によって、後日、あるいはその日のうちに書いているのだろう。紡績機械の「仕様書」をかたわらにして書いているのかと思われるほどに精密だが、リスター工場が当時そのようなものを見学者に配布するはずもないし、使節一行中の他の理事の報告書に依拠してこれを書いているとも思われない。右の文中の「糸ハ盤ノ周囲ニ白髻ノ如ク」とか、「盤ノ回ルニ從ヒ、糸ハ風ヲ帯ヒ宛モ白犀ノ（革で作った）槍鞘ヲ振回スルカ如シ」とかの、具象的な比喻の用法からいっても、筆者久米邦武自身がなみなみならぬ驚嘆をもって工程を観察し、その印象のなまなましいうちにこれを書きしめたことが察せられるのである。

このリスター工場は当時すでに2500人から3000人の工員を擁し、改造・拡張工事の完成のあかつきには、その倍の規模になるとの予定であった。岩倉一行は当時60余歳の社長リスター氏に会見して説明を聞き、その子息がちょうど横浜に出張して繭糸を仕入れているはずとのこと

も、その社長から聞いた。

11

1989年秋、シェフィールド大学で「岩倉使節団研究国際会議」が開かれたとき、私は他の約20名の参加者とともに、バスでこのリスター紡績会社や、岩倉らが翌日見学したハリファックスのディー・クロウ羊毛紡績工場（Dean Clough Mills）跡などをも見学した。だが、それらはいまや「跡」としか呼べないほどの廃墟に近いありさまで、そのごく一部が細々と操業しているだけであったり、工業博物館やイヴェント・ホールへの転換を計画したりしていた。工場はとりこわすのも容易でない立派な石や煉瓦の建物で、岩倉たちが感心して仰いだリスター工場の高さ80メートルの大煙突は、ヴェネチアのサンマルコ広場の鐘楼を模したという美しいすがたで、もはや煙を吐くこともなく曇り空にそそり立っていた。

岩倉一行はソルテヤおよびリスター工場見学の三日後、9月26日、ブラッドフォードから同じヨークシャー州内のシェフィールドに移り、当時のイギリス最大の製鉄工場、チャールズ・カメル氏（Charles Cammell, 1810-1879）の工場現場を、27日のまる1日かけてつぶさに見学した。

「朝九時ヨリ車ニ駕シ、「カメロ」氏会社ノ鋼鉄製造場ニ至ル、此場ノ盛大ナルコト、一区ノ広域中ニ、大小ノ煙突、参差トシテ天ニ朝シ、石炭の煙ハ、墨ヲ撥クカ如クニ、大空ヲ滾シテ轟起スルハ、暴風大雨ノ至ラントスル気色ヲナス、外ヨリ望ミテモ、已ニ人ノ心胆ヲ驚カス、前後ノ製造場ニ、如此キ壮大ナル場ヲ見ス」（Ⅱ.300p.）

との一節に始まるカメル工場見学記は、岩波文庫版で11ページにもおよぶ。ドイツ篇のクルップ工場見学の記とならんで、『回覧実記』中の圧巻の1章と称してよく、15年前（1856）に発明されたベセマ式回転溶鉱炉を用いての鋼鉄精錬の工程や、その鋼鉄による軍艦用の甲鉄板や、蒸気車用の車輪、スプリングなどの製造工程の叙述は、『回覧実記』の他章におけると同じく、編述者の漢語語彙のストックを総動員し、自在に合成し駆使して、まことにみごとなものである。福澤諭吉の主張に反して、明治日本人はこの漢語の知識、漢学の教養があったからこそ、西洋文明の総体と細部を的確に把握・領略することができ、それによって自国の近代化を遂行しえたことを、立証するような一章でもある。だが、このような工業技術についての観察記述ばかりを重ねると、岩倉使節団はやはり西洋近代文明のとらえやすい外面的成果のみを学んできたのだと、従来のステレオタイプ化した日本近代化批判の言をまたも繰り返されかねない。だが、事実はそんなことではなかった。久米の前引の一節にも、よく読めばすでにうかがわれるように、彼らはまさに、執拗なほどに西洋近代文明の物的側面を観察し、洞察することをおしてこそ、その背後に宿る近代西洋の思考様式に探りを入れ、ここにいたる精神の歴史の長い豊かな営みさえ知って、これに敬意をはらうようになった。最後に、この明治4年の外交使節が、どこまで19世紀西洋世界の精神的背景に触れ、それを理解しえたのかを、探ってみることとしよう。

IV 異文化への寛容と洞察

12

岩倉使節一行は明治5年正月21日(1872・2・29)ワシントンに着くと、代理公使森有礼やアメリカ側迎接委員に迎えられて、まっすぐに宿舎のアーリントン・ハウスに入った。冷たい雪の降りつづける午後だった。

いくら気丈な明治人たちでも、サンフランシスコから1ヵ月半かかった大陸横断の旅には、さすがに疲れはてていたのではなかろうか。一行がワシントンでの公の行動を開始するのは、到着4日後の月曜日、正月25日からである。その日の昼、使節団の首脳部は宿舎からほど近いホワイト・ハウス(「白館」)を正式に訪問し、第18代大統領グラント将軍に謁見した。第16代リンカーンが暗殺された(1865)あと、副大統領であったアンドルー・ジョンソンが昇格して1期つとめ、そのあとに選出された共和党の大統領(1869-77)である。

アメリカは南北戦争(1861-65)が終結してから7年目、国政の再編と国力の開発に全力をあげ、着々とその成果も見えはじめていたときだった。「御一新」から5年目の明治新政府の指導者たちには、その点が単に歴訪の最初の国であることをこえてきわめて刺激的に作用し、彼らの親身な共感を呼んだばかりでなく、その開化向上への意欲を鼓舞するところもまたはなはだ大きかったようである。

アメリカ政府と開始した条約改正交渉が、日本側国書に全権委任の記載がないことで蹉跌し、副使の大久保と伊藤がその信任状を得るために急遽いったん帰国する(旧2月5日ワシントン発)などという、思いがけない展開になったのは周知のことだが、その間にも、もう1人の副使木戸孝允は何人かの随員とともにアメリカの法制、教育制度、さらに憲法の研究にとりかかりはじめた。憲法については、副使たちの不在でやや暇になった久米邦武が、通訳官畠山義成を相手にアメリカ憲法の翻訳を進めていたところに、そのことを知った木戸が途中から参加してきたのだという(『久米博士90年回顧録』)。久米はそのような勉強を踏まえてのことか、正月27日、岩倉一行が国会(カピトル)を訪問し演説もしたことの記事のあとに、アメリカの「コンGRESS」と憲法の成立の歴史を簡略に紹介したうえで、さっそく次のような評価を下している。

「如此ニ論理ヲ尽シ、日月ヲ経テ、商定セル憲法ナレハ、其良善ヲ尽シ、人心ニ入ルコト、
 猶^{なお}天教ヲ奉戴スルカ如ク、干^{いまに}今九十六年、三十七州ノ多ヲ致シテモ、敢テ違戾スルコトナシ、
 (中略)固^{もとよ}リ人ヲ為^{もつ}ノ法ニ、完全ノモノアルヘカラス、人民ニ伸ヘハ、政府ニ縮ム、自由ニ切
 ナレハ、法度ニ^{ゆるやか}慢ナル、一得一失、理ノ自然ナリ、米^{わが}国ノ民ハ、此政中ニ化育セラレ、百
 年ニ垂^たレタレハ、三尺ノ童^{わらべ}も亦君主ヲ奉スルヲ恥ツ、習慣常ヲナシ、其弊ヲ知ラサルノミナ
 ラス、只其美ヲ愛シ、世界ヲ挙テ、己ノ国是ニ就^{つか}シメントス、造次^{そうじ}(わずかの間)ノ談ニモ、
 其感触ヲソナフ、到底其意想ノ移スヘカラサル、純乎タル共和国ノ生靈ナリ」(I.207-
 208p.)

「三尺ノ童」以下がことのほか愉快な一節ではないか。これは正月27日の記事につづいていても、例によって1段下げて添えられた感想・批評の部分であるから、その日だけではなく後の経験も含めて書かれているのだろう。いずれにしても、岩倉、久米らが、アメリカ人に会うたびにアメリカ式民主共和制の自己礼讃を聴かされ、「天教ヲ奉戴スルカ如」きその自信の強さに、ほとほと感心し、かつ呆れもしたことがよくわかる。

「只其美ヲ愛シ、世界ヲ挙テ、己ノ国是ニ就シメントス」とは、アメリカ人の今日まで変わらぬ楽天的独善主義が、南北戦争による混乱の直後であるだけに当時いっそう強調されていたことを思わせよう。アメリカ人はあそこからすでにそうであったのか、と私たちは岩倉らの当惑顔を思いうかべながら微笑せざるをえないのである。

「造次ノ談ニモ、其感触ヲソナフ」というから、日本使節団が政治制度の研究をも使命としていることを知って、アメリカ政府の高官たちが会談の合間に、あるいは日米相互に催された大宴会で隣席になった紳士淑女たちがその会話のなかで、アメリカ型民主制がいかにすぐれているかを吹聴し、明治日本がこれを採用することを勧めたのであろう。あるいはそんな機会でなくとも、おのずから彼らの口をついて出るのが、自国の制度の正しさ、偉大さを讃える言葉であったのだろう。「到底其意想ノ移スヘカラサル、純乎タル共和国ノ生靈ナリ」とは、この経験の繰返しから発せられた久米邦武の名言であった。

13

1870年代当時も明るい顔で声高に話し、大声でよく笑ったにちがいないアメリカ白人たちの自信満々の振舞いに、岩倉一行はときに辟易しながらも、けっしてこれに悪感情を抱くなどということとはなかったようだ。いや、むしろ彼らの言行のすべてに溢れる新興アメリカの進歩向上のエネルギーに、共感と好意を寄せるようにさえなっていたらしい。久米邦武にいたっては、彼自身、後年のどんな自由民権派よりも民権派となり、共和主義者となったかのように、『回覧実記』の随所に熱っぽい言葉でアメリカ民主主義礼讃を述べている。

ワシントン滞在もすでに2ヵ月をへた3月23日、岩倉一行は昼前から「ポスト・オフィス」(郵便院)と勸農寮を見学し、それぞれの事業の盛大かつ周到なことに打たれたが、その日の記事につづけて、たとえば久米は次のように書いている。――

「米^こ国^こハ、欧^こ洲^こ人^こ民^こノ開^こ墾^こ地^こナリ、欧^こ洲^こニテ自^こ主^こノ精^こ神^こニ逞^こシキ人、己^こカ不^こ羈^こ独^こ立^こノ智^こ力^こヲノベ、新^こニ一^こ大^こ生^こ業^こヲ興^こサント志^{こころざ}セハ、其^こ游^こ刃^{ゆうじん}(余裕、余力)余^こリアル、米^こ国^こノ広^こ土^こニ向ヒテ、開^こ墾^こヲ試^こム、是^こ此^こ国^こノ開^こケシ原^こ由^こニテ、英^こノ貴^こ族^こ「パ^こル^こチ^こモ^こール」、及^こヒ「ウ^こッ^こヤ^こム^こベン」等^こニテ証^こスヘシ、英^こ国^こノ属^こ地^こタリシトキヨリ、已^こニ此^こ国^こハ自^こ主^こ民^こノ移^こ住^こ営^こ業^こ場^こトナリシヲ以^こテ、欧^こ洲^こ自^こ主^こノ精^こ神^こ、特^こニ此^こ地^こニ鍾^{あつま}リ、其^こ事^こ業^こモ自^こラ卓^{おのずか}落^{たくらく}豁^{かつ}達^{たつ}ニテ、気^こ力^こ甚^{さかん}タ旺^こナリ、(中略)自^こ主^こノ論^こト、共^こ和^こノ議^こトハ、欧^こ洲^こニモ充^こチタレトモ、多^こク理^こ上^こノ談^こニテ、其^こ国^こノ実^こ際^こニ適^こセス、只^こ米^こ国^こハ純^こ粋^こノ自^こ主^こ民^こ集^こリテ、真^こノ共^こ和^こ国^こヲナス、其^こ由^こ来^こスル所^こハ、固^{もとよ}リ開^こ国^こノ元^こ素^こヨリス、此^こ採^{これ}風^こ者^こノ眼^こ光^こヲ着^こクベキ所^こナリ」(I.243p.)

アメリカに文明学習に来る者は、とくにこの民主主義が住民にとって根生いのものであるこ

とに着目せよ、とまでいっている。明治4、5年の日本外交使節団の一員としては、よく相手の歴史の概略をも把握して、意外といつていいほど鋭く遠くまで新興アメリカの精神構造をとらえている、と評すべきだろう。久米はこのあとに、欧州から新大陸への移民のなかには、もちろん「逋逃ノ藪（罪を逃れた人々）、無頼ノ群」も多かった、と『左伝』のなかの難しい漢語を使っていっている。だがその種の移民をも「其首領トナル士君子カ、自主ノ精神、他ニ優レ実用ノ學術ヲ教ヘタル功」によって指導し、国土開発に向かわせたために、今日の成功にいたったのだ、と評価はあくまで肯定的である。

岩倉一行は、前にも触れたように、原住民インディアンに不穏の動きがあることも知っていた。とくにワシントン滞在中には、黒人差別の長い歴史がアメリカ社会に難問を提していることを、みずからの偏見はあっても、それなりに洞察していた。またアメリカ人が、その共和制信奉と同じほど強烈にプロテスタンティズムを信奉していることを経験させられては、「孩嬰（赤ん坊）ノ胎ヲ出レハ、（その教えは）乳漿ト共ニ心髓ニ浸漬シ、身ヲ終ルマテ、其教中ニ薰蒿ス」「論高カラサルモ守ルニ篤ク、説怪ナルモ信スルニ誠ナリ、水火モ避ス、白刃モ踏ヘシ、困窮愁苦、愈信守シテ失ハス、言論ノ屈スヘクモ、精神ノ奪フベカラサル、即チ之ヲ嘲テ頑習骨ニ入ルト言フモ可ナリ」（I.344p.）と、新井白石のシドッチ審問後の感想をも思わせるような、これまた讃嘆と辟易の入りまじった言葉をしるしてもいた。

だが、そのようなアメリカ社会の抱えるさまざまな問題に対する懸念、懐疑、当惑を随所に洩らしながらも、全体としてこのアメリカ合衆国に対してほどはっきりと、露骨に、一国の政治の制度と成長のダイナミックスを肯定し、礼讃している編は、『米欧回覧実記』に他にないといつてよい。明治5年7月3日（1872・8・6）の朝、いよいよボストンの港から英国リヴァプールに向かって出帆するにあたっては、上下市民の熱烈な見送りを受け、「米国ノ人ハ、外人ヲ視ル一家ノ如ク、交誼ニ厚キコト、同胞ニ於ルカ如シ」「嗚呼此開明ノ際ニ当リ、鎖国ノ宿夢ヲ醒シ、世界交際ノ和氣ニ浴センコト、我日本ニアリテハ、皆人喫緊ニ心ニ銘セサルベカラサルナリ」と、岩倉一行もさすがに深い感銘を催したことを述べている。そのうえで、この「第一編米利堅合衆国ノ部」の結論として、久米は次のように書いて、いわば一行のアメリカ像について念押しをした。

「桑港ニ着セシヨリ、波士敦ヲ出船スルマテ、米國ヲ經歷シ、実境ヲ目撃シタル情実ヲ簡略ニ言ヘハ、此全地ハ、歐洲ノ文化ニ從ヒテ、其自主ノ力ト、立産ノ財本ト、溢レテ此國ニ流入シタルナリ、米國ノ地ハ、歐洲全土ニ比スルトイヘト、歐洲ハ頗ル荒寒ノ野ニテ、其開化繁庶ノ域ハ、三分ノ一ニスキス、王公、貴族、富商、大社アリテ、其土地、財産、利權ヲ專有シ、各習慣ニヨリ國ヲナス、晩起ノ人ハ、其自主力ヲ遅クスルニ由ナシ、因テ此自由ノ境域ヲ開キテ、其營業ノ力ヲ伸フ、故ニ其國ハ新創ニカ、リ、其土ハ新開ニカ、リ、其民ハ移住民ニカ、ルト謂フト雖モ、実ハ歐洲ニテ尤モ自主自治ノ精神ニ逞キ人、集リ来テ之ヲ率フル所ニシテ、加フルニ地広ク土沃ニ、物産豊足ナレハ、一ノ寛容ナル立産場ヲ開キ、事事ミナ龐大（大まか）ヲ以テ世ニ全勝ヲシム、是米國ノ米國タル所以ナリト謂ヘシ」（I.369p.）

岩倉使節団がビスマルクのプロシヤばかりを目指していたかのように論ずるのが、いかに事実を歪めているかは、この一節を読むだけでも察せられよう。この一節が当時の日記に属するものではなく、おそらくヨーロッパ諸国をも回覧したあとに書き加えられた批評であることを考えあわせれば、なおさらそうである。岩倉使節団の米欧回覧当時、明治日本はその進路において、政治の面でも、経済や教育の面でも、このアメリカまで含むなお幅広い選択肢を擁していたのである。そして1870年代初めに、日本人がアメリカ文明の基幹について、すでにこれだけ精細でしかも寛容な肯定的理解をもっていたことは、今日なお摩擦の多い日米交渉の場で、彼我ともにときおり想いおこしてもよいことではなからうか。モンデール駐日アメリカ大使などにはぜひ知っておいてほしい史実である。

14

岩倉使節団がその米欧回覧の道程において、産業革命の所産である技術革新の面や政治経済の制度などばかりでなく、このように、それらの背後にある西洋近代の精神の働きにまで眼を向けつづけていたことは、『回覧実記』が他の各編でも随所に雄弁に証し立てている。

それらの箇所を次々にあげて註記と批評を加えてみることは、もちろん興味深いし、大事な仕事である。たとえば、明治5年8月25日、ロンドン滞在中の一行は「ブリッチ、ミジエム」（大英博物館）を見学したが、『回覧実記』の評言は博物館というものの意味を次のように論じている。

「博物館ニ観レハ、其国開化ノ順序、^{おのずか}自ラ心目ニ感触ヲ与フモノナリ、蓋シ国ノ興ルヤ、其理^{りうん}繚^{うら}ノ衷^{ひもと}ヲ繙クコト、俄爾^{がじ}トシテ然ルモノニアラス、必ス順序アリ、先知^{さき}ノモノ之^{これ}ヲ後知ニ伝ヘ、先覚^{さきま}ノモノ後覚^ごヲ覚シテ、漸^{ぜん}ヲ以テ進ム、之ヲ名ツケテ進歩ト云フ、進歩トハ、旧^{ふる}ヲ捨テ、新^{あらた}キヲ図ルノ謂ニ非ルナリ」（Ⅱ.114p.）

文明とは知識と技術と知恵の蓄積があつてこそ、ゆるやかにほんものの展開をしてゆくのだという、ヨーロッパの歴史を通じて正統な一種の文化的保守主義を、久米らはこの大博物館の見学をとおして感じとり、それによって圧倒されるような気さえたのである。それと同様に、基礎の原理の把握とそれにもとづく研究の積み重ねの重要性ということも、さまざまな製造工場の現場で彼らが痛感させられたことだった。

たとえば、「総テ製作場ニハ、図引（設計図）ノ肝要ナルコト、人体ニ脳アルカ如ク、工業ノ綱領トナルナリ」とはリヴァプールの造船所で学んだことであり、この実感に立って久米は日本の産業と学問の現状を次のように反省せずにはいられなかった。

「我邦ノ工事、多ク粗鹵ナルハ、其原則物理、化、重ノ学（力学）、及ヒ度学（幾何学）ニ暗キニヨレトモ、畢竟^{ひっきよう}ハ図引雛形（模型）ニ精神ヲ用ヒ、費用ヲ擲^{なげう}ツヲ欲セス、一念心ニ浮メハ、空^{くう}ニヨリテ意想^{めぐら}ヲ回シ、大略慮至レハ、直ニ工業ニ下手シ、成否^{いってき}ヲ一擲ニ試ミ、成ラスシテ家ヲ傾ルモノ、比比ミナ然リ、工ノ進マサルハ、蓋シ此ニ本ツク、學術ノ開ケサルモ、亦此ニ本ツク」（以上、Ⅱ.140-141p.）

緻密でかつ遠大な企業家精神が日本人に不足ないし欠如しているということは、慶応3年(1867)、完成間近なスエズ運河掘鑿の事業を遠望しながらフランスに向かった渋沢栄一も、同様に感じたことであった(『渋沢栄一滞仏日記』)。そして久米邦武がこの日本文化批判を、ニューカッスルの羅紗工場での所感として、さらに徹底した言葉で述べなすと、それはこんどは福沢諭吉の『学問のすすめ』の学問観と言々句々相呼応するかのときものとなったのである。

「東洋ノ西洋ニ及ハサルハ、オノ劣ナルニアラス、智ノ鈍キニアラス、只済生ノ道ニ用意薄ク、高尚ノ空理ニ日ヲ送ルニヨル、何ヲ以テ之ヲ証セン、東洋ノ民、其手技ニヨリテ製作スル産物ハ、高尚ノ風韻アリ、警拔ノ経験ヲ存シ、西洋ニ珍重セラル、是才優ナルナリ、応対敏機ニ、営思活撥ニシテ、模擬ノ精神強ク、当位即妙ノ智ヲ具ス、是智敏ナルナリ、西洋ノ民ハ之ニ反シ、営生ノ百事、皆屹屹トシテ刻苦シタル余リニ、理、化、重ノ三学ヲ開キ此學術ニモトツキ、助力器械ヲ工夫シ、力ヲ省キ、力ヲ集メ、力ヲ分チ、力ヲ均クスルノ術ヲ用ヒ、其拙劣不敏ノ才智ヲ媒助シ、其利用ノ功ヲ積テ、今日ノ富強ヲ致セリ」(Ⅱ.253-254p.)

ここには東洋人の「敏」、西洋人の「鈍」といったステレオタイプが出来かかっているが、これはあるいは「文明」の圧力をいちばん強く感じたイギリスでの、日本人の自己激励の一法でもあったかもしれない。日本人の「手技」の工芸品、とくに陶磁器類が折からの日本趣味の流行のはじまりともあいまって、イギリスのミントンでもフランスのセーヴルでも高く評価されていたのは、有田代官の子息たる久米邦武を大いに得意がらせたことでもあった。この「当位(意)即妙」の東洋流の名人芸に対し、西洋人は「屹屹トシテ刻苦」というのは面白い用語だが、これは同じ箇所その他の表現によれば「物ニツキ理(法則性)ヲ拙テ、刻苦(する)ノ精神」のことであり、物に即して「疑歎ニヨリテ、其原因ヲ討究スル力」、つまり福沢のすすめる「学問」だったのである。

15

近代的工業化の最先端をゆくイギリスと明治日本との「文明の時差」を、50年いや30年と性急に論じあう一方で、岩倉一行は、この産業革命をもたらした根本の動因たるべき思想の営みを、それなりに探りあてた、とまでいわなくても少なくとも探ろうとしていた。明治5、6年というあの性急な変化の時代にあって、すでに森鷗外のいう“Forschung”(実験追究)の問題に近いところまで眼を向けていたことは、やはり卓抜な洞察力であったと評すべきだろう。

フランスの首都パリは、普仏戦争とパリ・コミュンヌ(1871)の大争乱をへたばかりであったのに、ここに2ヵ月滞在した(明治5・11・16—明治6・2・17)岩倉使節一行にとっては、冬のロンドンから来ればなおさらのこと「雲霧ヲ披キテ、天宮ニ至リシ心地スル」(Ⅲ.41p.)「麗都」であった。「黄金ノ氣、庭ヲ包ンテ起」リ(同、50p.)、市民は「歌舞終日無_セ戚容_セ(憂い無き)」(同、52p.) 欧州の「都雅ノ枢軸」であり、「文明都雅ノ尖点」(同、55p.)でもあった。

といって、岩倉一行はこの都市美を絶賛しながらもこれに眩惑されていたわけではなく、これまでの各地におけると同様に精力的にさまざまな都市施設、国家機関、諸工場を視察してま

わって、それぞれについて詳しい記述を残した。そのなかで、ここでは、明治6年(1873、この年から陽暦)1月6日午後、パリの国立図書館を見学した折の所感を引いて、岩倉一行が同時代西洋文明の基本について得た一つの結論と見なすこととしよう。

「西洋の日新進歩ノ説、日本ニ伝播シテヨリ、世ノ輕佻^{おもんばか}慮^{ちくちくぜん}リ短キモノ、逐逐然トシテ、旧ヲ棄テ新ヲ争ヒ、所謂^{いわゆ}ル新ナルモノ、未タ必モ得ル所ナクシテ、旧ノ存スヘキモノ、多ク破毀^{のこり}シ遺ナキニ至ル、噫是豈日新ノ謂ナランヤ、進歩ノ謂ナランヤ、百年ノ大木ハ、一タニシテ成長セス、古ノ萌芽モ、今ニ至テハ斧柯^{ふか}ヲ用フ、吾人ノ身ハ、嬰孩^{えいがい}ノ長セルナリ、新陳ノ交代ヨリシテ謂ヘハ、傾刻^{けいこく}モ故吾^{こご}ナシ、其成形ヨリシテミレハ、昔日ノ嬰孩ナリ、是ヲ進歩トイフ、是ヲ日新ト云、大陸地方ノ人種ハ、資性重厚ナリ、殊ニ西洋各地ノ民ハ、物ヲ棄廃スルニ洩シ、其積成ノ跡ヲミレハ、日新進歩ト称スレトモ、元ハ磨切ノ功ヲ重ネテ、光沢ヲ発セルナリ、(中略)

西洋ノ書庫、博物館ヲミル毎ニ、其用意ノ厚キ、我東方ノ遠國ノ物モ、重貨ヲ惜マス、勞苦ヲ厭ハス、收拾採録セリ、以テ我邦人ニ示スニ、往往ニ驚異^{みづか}ウ知ラス、却テ其解説ヲ聞テ、我内地ノコトヲ詳悉シ帰ルニ至ル、西洋ノ能ク日新シ、能ク進歩スル、其根元ハ愛古ノ情ニヨレリ、試ミニ見ヨ、凱旋門ノ壮大ハ、羅馬ノ古城門ニ脱化シ、『セイン』河橋ハ『タイハル』(テヴェーレ河)橋ニ脱化セリ、千百年ノ智識、之ヲ積メハ文明ノ光ヲ生ス、之ヲ散スルトキハ、終古葛天氏(中国神話中の無教化主義の帝王)ノ民ナリ」(Ⅲ.70-72p.)

当然、大英博物館での所感とかさなるところはある。だが、ここでは一段と明瞭に、輕佻な進歩主義、「文明開化」主義を批判して、文明は「積成」によってこそその重厚な「光沢ヲ発」すべきことを説いている。アメリカ人の楽天的な共和思想と開発開化のイデオロギーに浅からぬ共感を示す一方で、この「文明都稚」の中心地で反「文明開化」の文明観に強くコミットするとは、岩倉使節団の見識たるや、まことに見あげたものではなからうか。あるいはこれは、もともと史癖が強く、やがて帰国後は修史館編纂官となり、東京大学史学教授となる岩倉秘書官久米邦武の個人的見解に近いものだったろうか。たとえそうであったとしても、このような見識の持ち主を終始擁して回覧をつづけ、その観察と考察とをまとめさせた外交使節団とは、またなんと度量が大きかったことか。

岩倉使節一行は、この後、戦勝に酔う新興ドイツの首都ベルリンでは、その風俗の頹廢と俗物の跋扈に輦蹙して、ニーチェの『反時代的考察』そのままの反応を示す。帝政ロシアの停滞ぶりを目撃しては、レザノフ艦隊の長崎来航(1804)以来日本人がひさしく抱いていた「虎狼心ヲ以テ露國ヲ憚^{はばか}ルノ妄想」からはじめて目覚める思いをし、「從來妄想虚影ノ論ハ、痛ク排シテ、精神ヲ澄センコト、識者ニ望ム所ナリ」(Ⅳ.110p.)との名言を吐く。そしてイタリアのローマでは、サン・ピエトロその他の寺院の豪華さに反発して、このために搾取された人民の膏血を思えば「厭惡^{えんお}ノ意ヲ起サシム」とするすが(Ⅳ.315p.)、初夏のヴェネチアでゴンドラに乗って運河を滑れば、「水調一声」の瀏^{りゅうりゅう}唳として響くとき、「文明」の官能性のただなかに「登仙」することもできたのである(Ⅳ.346p.)。

明治5、6年(1872、73)という内外の危機のさなかから出帆して、変動する西洋文明の限らない多様性に触れ、それをこれほど「屹屹トシテ刻苦」学習しながら、なおその根本の動因を洞察するとともに、豊かな感性をもってその多彩さを享受することもできた特命全権大使岩倉一行の能力に、私たちは『回覧実記』を読み返すたびに感嘆を繰返し、なおいつその関心を寄せずにはいられない。

参 考 文 献

- 久米邦武編述『特命全権大使米欧回覧実記』1～5、博聞社、1878(明治11)
同(田中彰校注)『特命全権大使米欧回覧実記』1～5、岩波文庫、1977-82
芳賀徹「明治一知識人の西洋体験——久米邦武の『米欧回覧実記』」、『島田謹二教授還暦記念論文集・比較文学比較文化』弘文堂、1961
大久保利謙編『岩倉使節の研究』宗高書房、1976
田中彰『岩倉使節団——明治維新のなかの米欧』講談社(現代新書)、1980
マリウス・B・ジャンセン(加藤幹雄訳)『日本——二百年の変貌』岩波書店、1982
泉三郎『明治四年のアンバサドル——岩倉使節団文明開化の旅』日本経済新聞社、1984
泉三郎『「米欧回覧」百二十年の旅——岩倉使節団の足跡を追って・米英編』図書出版社、1993
田中彰・高田誠二編著『「米欧回覧実記」の学際的研究』北海道大学図書刊行会、1993
高田誠二『科学史からみた久米邦武』久米美術館研究報告V、1993
西川長夫・松宮秀治編『「米欧回覧実記」を読む——1870年代の世界と日本』法律文化社、1995